

小千谷市図書館等複合施設 情報環境基本計画・説明書

2022年10月27日版

※情報環境基本計画・説明書は、情報環境や社会環境の変化、情報技術の動向等を踏まえ、随時更新するものであり、記載内容は2022年10月27日時点のものとなります。

目次

はじめに.....	1
第1章 図書館等複合施設とは	2
1. 基本方針	2
2. 図書館及び（仮称）郷土資料館の基本理念及び基本方針.....	2
3. コンセプト	2
4. 暮らしのり・デザインとは.....	4
5. 建築計画について.....	5
6. 情報環境とは.....	6
第2章 情報環境を計画するにあたって	8
1. 図書館等複合施設建設にあたっての課題認識.....	8
2. 「知る」ことを取り巻く現状.....	9
3. 図書館等複合施設での情報環境を通じた体験.....	10
第3章 資料とは.....	11
1. 資料の位置づけ.....	11
2. 3種類の資料.....	11
第4章 実空間における資料の用意	13
1. フロートを通じて「知る」こと	13
2. 知のアンカー等における「知る」こと.....	14
第5章 バーチャルな空間における資料の用意.....	15
1. 利用者がつくる資料のリンク	15
2. 利用者がつくる郷土資料	17
第6章 「知る」ための郷土資料の活用.....	18
1. 郷土資料の配置.....	18
2. 郷土資料の使い方.....	18
第7章 暮らしのり・デザインに向けたアンカーの活用	19
1. フロートと利用者の集まり.....	19
2. 共有される関心とアンカーのリンク	19
3. 暮らしのり・デザインと資料の関連づけ.....	20
4. アンカーのまちへの展開	21
第8章 学び合う機会のあり方	23
1. 社会のなかで「知る」こと.....	23
2. プロジェクト型の学び合い.....	23
3. 子どもが遊び、学び、「知る」ための場所・機会	24

はじめに

- 小千谷市に新しくできる図書館等複合施設は、図書館、郷土資料館、市民の交流や活動の場、子育て支援スペースなどが融合した新しいタイプの公共空間です。
- 図書館等複合施設は、本や文化財、遊ぶ子ども、市民の活動などを目にしながら、思い思いに過ごすことのできる場所です。もちろん、図書館として、郷土資料館として、子育て支援施設として、子どもの遊び場として、活動・交流のための場として、一人ひとりの目的に応じて使うこともできます。
- そのような様々な過ごし方と使い方を包摂しつつ、図書館等複合施設は、一人ひとりが「知る」ことで自分の暮らしを変え、共に「知る」ことで自分たちの暮らしをより良くし、小千谷のまちがよくなっていく「暮らしのり・デザイン」を後押しする施設でもあります。
- 「知る」とは一般的には新しい知識を蓄えることですが、ここでは、自分がこれまで認識していたことが更新されることを重視します。
- たとえば新しい関心に気づいたり、自分が蓄えてきた知識では捉えられない物事に触れたり、さらにはこれまでの常識や世界観が覆ったりすることなど、自分にとっての〈当たり前〉が更新されることです。
- このように〈当たり前〉が更新されるなかで、答えのないことを知ろうとするようになっていきます。それをここでは「問い」が生まれると言います。
- そのような体験は、読書や鑑賞のみならず、体を動かし、何かをつくるために手を動かし、まちなかを歩き回り、誰かと言葉を交わすことでも起こります。
- さらに言葉だけでなく、触れたり、味わったりすることも含め、五感すべてを通して感じた体験からも「知る」ことはできます。
- 図書館等複合施設では、資料の用意はもちろん、遊び、つくり、語り合うことができるように、また五感すべてを通じた体験ができるように、空間や機会が用意されています。さらに、自分たちの暮らしやまちを変えていく活動を支えたり、そのために人と人がつながるための機会や仕組みも用意されています。
- 情報環境は、このようにまちづくりの拠点となる図書館等複合施設において、「知る」という行動を支えるすべての場のことをいいます。情報環境は「知る」ことを体験し、その体験が連鎖していくプロセス、また人と人がつながり、活動へと転じていくプロセスを「知る」ことを通じて後押しします。
- この計画は、そのような新しい図書館等複合施設とその情報環境について説明するものです。
- なお、情報環境は、情報技術の進化と普及に合わせて更新されていくべきものです。この計画も、情報環境の更新に合わせて適宜改定されていくものであり、ゆえに暫定版の計画となります。

第1章 図書館等複合施設とは

1. 基本方針

○小千谷市では平成 28 年 3 月に「西小千谷地区市街地まちづくり基本計画」を策定しました。そこで、旧小千谷総合病院跡地の役割として次の基本方針が示されました。

賑わい・交流・憩いの創出

2. 図書館及び（仮称）郷土資料館の基本理念及び基本方針

○上記「旧小千谷総合病院跡地整備計画」を踏まえ、平成30年3月に策定された「小千谷市立図書館及び（仮称）小千谷市立郷土資料館基本計画」では、図書館及び（仮称）郷土資料館の基本理念・基本方針が次のように設定されています。

■基本理念

- ・ここに来れば小千谷のことがわかり、人と人が結びつく施設とします。
- ・小千谷市民の誇りとなる施設とします。
- ・訪れるたび新たな発見があり、ワクワクする施設とします。

■基本方針

- ・市民の生涯学習・余暇活動を支援し、あらゆる世代が気軽に集い、交流できる場とします。
- ・最新の資料・情報を収集し提供することで、地域の情報発信・情報提供の拠点とします。
- ・小千谷市の歴史・文化を未来に伝えるための資料・情報、学習機会を提供します。
- ・利用者の多様性に応じて、ユニバーサルデザインに配慮します。
- ・学校や地域、家庭への学習支援を積極的に行います。
- ・市民とともに成長しあえる場とします。

○情報環境を考える上で、基本理念に示された「小千谷のこと」がわかることと「訪れるたびに新たな発見」は、まさに「知る」ことといえます。

○これらは、自分の身の回りに関する認識と広く世界に対する認識の両方が更新されるような場所であるということであり、情報環境において支えるべきことといえます。

3. コンセプト

○令和元年7月に PFI 事業として実施する前提で公表した資料で掲げた事業コンセプトは次のとおりであり、本事業においても踏襲されています。

①地域の知の拠点の創出

- ・ICT の急速な進歩によって情報の姿が変わり、情報と人のつながり方が変化している今、公共図書館は、収蔵資料の提供にとどまらず、デジタル情報を含めた多様な情報を提供し、そこに集う人同士が共に学び合う場が変わりつつあります。共に知り、共に創造する機会やリテラシーを届け、情報と情報、情報と人、人と人をつなぎ直し、ここから新しい社会的な取り組みや多様なコミュニティが生まれていく場を目指します。

- ・デジタルアーカイブを含む地域の知の情報基盤を構築し情報資産の共有化を図るとともに、デジタルメディア等を活用しこれらの資源への自由なアクセスや積極的な二次利用を可能とすることで新たな知的創造を促進します。
- ・この情報基盤が地域の多くの人々にいきいきと活用され、知の再創造を生むような循環を創り出すためには、情報リテラシー向上のための支援が不可欠です。情報を収集、編集、表現、発信する技能、他者と対話し関係性を取り結ぶスキルを獲得する機会やプログラムを用意し、より多くの人々が知り、表現する楽しみを感じられる新しい“知る”スタイルを提供します。

②多様な機能の融合・相乗効果の発揮

- ・図書館を核として様々な機能を一体的に整備、維持管理・運営することにより、これまでの公共施設の枠にとらわれない柔軟な施設のあり方の実現、相乗効果の発揮、将来の変化への適切な対応等を実現します。
- ・例えば、郷土資料を関連図書とともに融合展示することで施設に訪れた人々が自然と目に触れ多角的な学びを得ることができるようになります。また、屋内広場での児童図書の配架や絵本の読み聞かせ・子育てサークル活動の実施、企画展示スペースや共有スペースを活用してのコラーニング・コワーキング・講座の実施等、機能間がシームレスにつながることで、利用者のアイデア次第で様々な形での利用が可能な施設とします。

③まちづくりの拠点

- ・旧小千谷総合病院は、中心市街地における賑わいや交流の創出にも寄与してきた経緯があり、その移転は、中心市街地の活力が低下する要因の一つとなりました。本事業においては、その跡地を活用することにより、新たな賑わいと活力を生み出すことが期待されています。
- ・中心市街地に新たな賑わいや活力を生み出すには、新しい価値を生み出す人の存在が不可欠です。これまで積み重ねてきたまちの文化や人々の暮らしに新しい価値観を与え、新しい魅力を生み出すことのできるプレイヤーが地域にたくさん生まれることが必要です。本施設が家でも学校でも職場でもない第三の居場所（サードプレイス）として、人々が日常的に訪れるコミュニティの場となり、ゆるやかなつながりから新たな創造が生まれていく場をつくります。
- ・少子高齢化の進行を踏まえると、今後本市においては住民自治を推進することが重要であり、そのためにはまちづくりに主体的に参加する市民の活躍が必要です。事業者には、開業準備段階から運営に関するワークショップを開催するなど市民参加を促し、具体的な活用のアイデアや運営の工夫を反映させていく開かれたプロセスのなかで、本施設が私たち市民の財産であるという認識（オーナーシップ意識）を育み、市民の主体性を形成していくことを期待します。また、供用開始後も、まちづくりを担う市民、事業者及び本市の三者が、対等な立場でそれぞれ積極的に施設の運営に関与し、常によりよい施設のあり方を相互に提案し議論していくことを目指します。官民によるイコールパートナーシップの構築を通して、今後の本市におけるまちづくりのモデルとしての役割も果たします。
- ・地元商店街との連携、近隣公共施設や関係団体と連携した観光資源を活用しての体験プログラムの構築、学校図書館と連携しての探求的な学習の支援など、積極的なアウトリーチ活動を展開します。

4. 暮らしのリ・デザインとは

- 事業指針では、図書館等複合施設の建設にあたっての原点として、「(施設の) 新たな活用をし新たな魅力を生み出すことで、中心市街地における活力の再創出を図り、市民の暮らしをより良くする」という意味を持つ暮らしのリ・デザインを大切にすることを決めました。
- ここでは、この暮らしのリ・デザインを、一人ひとりが自分の暮らしを変えようとし、自分たちの暮らしをより良くし、小千谷のまちがよくなっていくことと捉えます。

■「知る」ことを起点として、自分の暮らしを変えること

- 暮らしのリ・デザインは、「知る」ことによって暮らす上での考え方や行動などを変えることから始まります。
- 生活習慣を変えたり、趣味やスポーツを始めたり、つくったことのない料理に挑戦したりすることから、転職や起業のような人生にかかわるものまで含まれます。自分にかかわる何かを変えたり、新しく始めたりすることが、そのはじまりです。

■人と人がつながり、交流するなかで、それぞれの暮らしが広がること

- 「知る」ことを通じて関心が広がり、行動が広がることで、これまで出会ってこなかった人たちとつながり、交流の輪が広がることもあります。それも暮らしが変わることであり、暮らしのリ・デザインになります。
- このような暮らしの広がりや、自分の暮らしの変化であるとともに、自分たちの暮らしをより良くする一歩となります。

■交流を重ねるなかで、共に行動し、自分たちの暮らしをより良くすること

- そのような交流を重ねていくなかでは、日々の暮らしについて情報を交換し、共通の問題や価値観に気づくこともあるでしょう。
- そして、そのような気づきがきっかけとなって、自分たちの抱える問題を解決したり、自分たちが求める価値を実現しようとしたりすることもあるはずです。
- 「知る」ことを通じて一人ひとりの暮らしを変えていくことから始まり、自分たちの暮らしをより良くしようとする一連の展開が暮らしのリ・デザインであり、小千谷市というまちがよくなっていくことへとつながっていきます。
- 図書館等複合施設では、このような意味での暮らしのリ・デザインを支えます。そして、情報環境は、そのきっかけとなり、また持続していく上で不可欠な「知る」という行為を支えるものです。

5. 建築計画について

- 図書館等複合施設は、四季とともに移ろい、時代とともに変化し続ける小千谷のを感じることができる空間です。
- 動く書架や展示台（フロート）が置かれた動的な資料空間、その時々に応じて使われ方が変化する活動の場（アンカー）、季節ごとに様相を変える小千谷のまちとの結びつきが深い屋上空間（ルーフ）から構成されています。
- これら3つの要素が組み合わさり、さらにバーチャルな空間との往復運動を起こしていくなかで「知る」ことを支え、暮らしのり・デザインを後押しします。

■フロート：動的な資料空間を構成する動く書架や展示台

- フロートとは、レール上を動く書架や可動式の展示台のことです。図書館等複合施設では、このフロートによって動的な資料空間が形成されます。
- フロートは、その時々で資料と資料の関係性を組み替えることができ、たくさんの「小さな資料のまとめり」をつくることができます。そして、可動式の展示台があることで、本だけでなく、郷土資料や地域での活動の成果などを組み合わせて配置することもできます。
- 「小さな資料のまとめり」を利用者とともに作り続けるうちに、資料と資料のあいだ、書架と書架のあいだに利用者の関心が浮かび上がり、「小千谷のこと」への気づきを促し、また共通の関心を持った利用者に共有される場をつくる仕組みとなっています。

■アンカー：その時々に応じて使われ方が変化する活動の場

- 図書館等複合施設には12個のアンカーと呼ぶ活動の場があり、それぞれの性能や広さ、備品に応じて利用者が使い分けることができます。
- アンカーのひとつが「知のアンカー」であり、フロートで構成される動的な資料空間とともに資料を用意する空間です。
- それ以外のアンカーは人々の活動を受け止めるとともに、フロート等で浮かび上がった関心によって人々をつなぐためにも活用され、ひいては暮らしのり・デザインの実践の場となります。

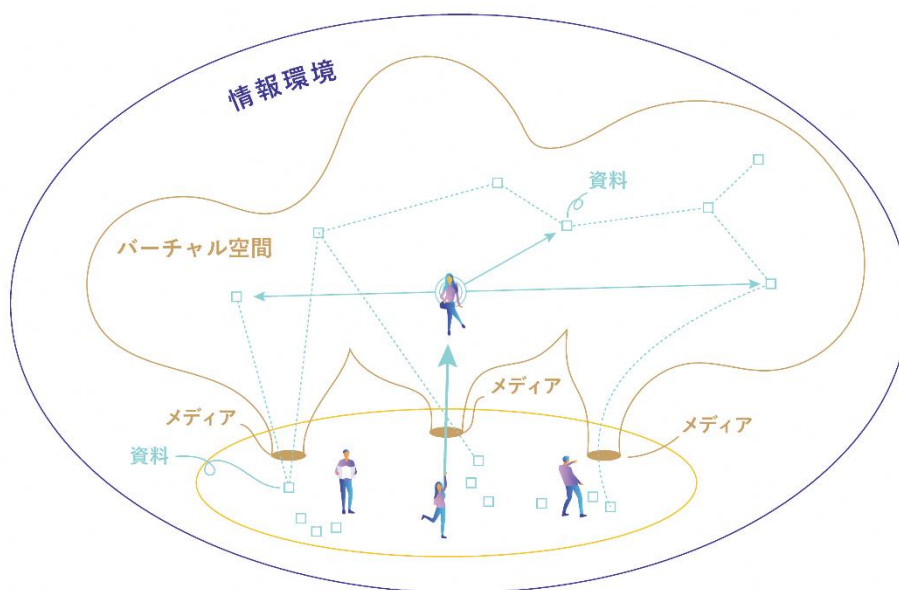
■ルーフ：季節ごとに様相を変える小千谷のまちとの結びつきが深い屋上空間

- 施設にかかる大きな屋根は、夏の太陽を遮り、冬の風雪をしのぐ設備であるとともに、イベントの場ともなり、四季折々の小千谷のことを体験することができる場にもなります。
- その意匠からは、小千谷の地形や市民が大切に思う風景も想起され、ルーフがまちのシンボルにもなっています。

6. 情報環境とは

■ 「知る」という行動を支えるすべての場

- 情報環境は、「知る」という行動を支えるために用意されたすべての場です。
- フロートに資料が配置される空間はもとより、様々な活動を支えるアンカーやルーフも含む施設の空間、さらには施設外に点在する広い意味での文化財や、市民等が活動する場所といった実空間も含まれます。
- 実空間とバーチャルな空間、施設の内外を問わず、「知る」という行動に対して用意された場をすべて情報環境と考えます。



■ 「知る」ことを支える資料のネットワーク

- 情報環境では、多様な資料が用意されており、施設職員や利用者によってそれらが関連づけられ、ネットワークが形成されていきます。
- バーチャルな空間では資料のリンクが無限に広がり、実空間で手に取った資料からリンクをたどることで新たな資料に出会うことができます。バーチャルな空間の入口は、インターネット利用の得手不得手にかかわらず、公平に開かれています。
- さらに、実空間ではフロートの組み合わせのなかで、利用者が各々に資料を関連づけていきます。フロートは自然と目に入るためにバーチャルな空間以上に公平です。
- 利用者は、資料のネットワークのなかで見知らぬ資料に出会うことで「知る」ことができ、またこれまで気づくことのなかった自分たちの関心も「知る」ことができます。そして、資料を関連づけるなかで関心が可視化され、共通の関心が浮かび上がります。
- そして、その関心を実空間で顕在化する「小さな資料のまとめり」は、関心を共にする利用者を緩やかに引き寄せていきます。また、その関心を反映したアンカーでの活動は、関心を共にする利用者を引き寄せ、コミュニティがつくられていくきっかけとなります。
- 情報環境はこのように、資料のネットワークによって「知る」ことを支え、人と人がつながることも支えます。

■人々がかかわり、育て、「知る」ことをつくる環境

- 情報環境は、図書館等複合施設とともにつくられ、「知る」ために用意されますが、完成されてはいません。
- 多くの人々が編集にかかわることで充実するウィキペディアや、多くの動画がアップロードされることで充実するユーチューブのように、利用者が手を加えることで充実していけるような場や仕組みとして情報環境を用意します。
- さらに、新しいメディアの登場や情報に関する技術の展開を捉え、必要に応じて仕組み自体を組み替えていくことができる柔軟でオープンな仕組みとして情報環境を用意します。

第2章 情報環境を計画するにあたって

1. 図書館等複合施設建設にあたっての課題認識

- 事業指針では、施設のあり方における方向性及び乗り越えるべき課題を次のように整理しています。(情報環境にかかわる部分のみ抜粋)
- この課題認識は、「知る」ことを改めて考え、共に「知る」こと、また誰かが「知る」ことを支える資料をともにつくることが重視されていると捉えられます。

①図書館の役割

- ・本事業では、デジタル情報も含めた情報の形態、情報が置かれる場や空間、その中で起こる活動等も含めた様々な観点から、人々の「知る」自由を支えるための図書館機能の検討を進めます。
- ・「知る」ための情報のあり方を一方向のものにとらえるのではなく、相互作用によって広がる可能性にも重きを置きます。利用者の立場や運営の立場に関わらず、人々が相互に「知り」、関わり合いながら「学びあう」という相互作用、そして融合施設として郷土資料館機能や子育て支援機能、交流促進・創造機能も含めた機能同士の相互作用、それらが自由に柔軟な状態で発揮され、まちやこの施設に集う人々の可能性を大きく広げていくことを目指します。

②情報環境・知識環境

- ・デジタル情報社会の未来像を想定し、実空間と情報空間の融合による新しい情報環境・知識環境の整備に取り組むことで、地域格差や環境格差を解消し、情報や知識への多様なアクセスを保障し、新たなコミュニケーションの可能性を広げていきます。
- ・施設のなかで生み出していきたい体験や、くらしや学びのシーンをイメージした上で、アナログ・デジタルどちらかに限らず、あらゆる情報のなかで本施設に最適な環境や体験をデザインしていく必要があります。

③郷土資料・文化財

- ・資源の可能性を最大化していくために、郷土資料をはじめとした地域資源のハブ的な機能を担っていく施設を目指していきます。
- ・市内に点在する文化、観光、産業等のリアルな資源そのものを地域資料と捉え、地域の経済産業の課題や可能性も把握したうえで、行政や民間が垣根なく一体となつてつないでいく必要があります。
- ・地域に点在する資料を市民自らの手で残していけるような体制やそれを可能にする環境づくりにも取り組んでいきます。

2. 「知る」ことを取り巻く現状

○ただ、テクノロジーの変化がかつてないほど速く、加速度的に情報化が浸透していく現在では、「知る」ことが難しくなっている状況があります。

■知識を得ることは簡単になった一方、「知る」ことが難しくなっています

- インターネット上では、キーワード検索をすれば数多くの情報が見つかります。ツイッターやインスタグラムはタイムラインを眺めるだけで情報が目に飛び込んできます。
- このように知識を得るための道具として便利になったインターネットですが、一人ひとりの関心に合わせて情報を提供するようになったため、そこで得られる知識が偏るようになりました。
- そのためインターネットでは、自分の認識を確かめるようなことしかできず、認識を更新するという意味で「知る」ためには工夫が必要になりつつあります。

■図書館でも「知る」ことは難しくなっています

- たくさんの資料が集められた図書館は、思い思いに資料を手に取り、資料を関連づけて「知る」ことができる場所です。
- ただ、多様化するニーズに応えるために多くの資料を用意するようになった図書館は、自由に行き来するには広く、思い思いに手に取るには資料が多くなってしまいました。
- 検索機能が便利になったことも手伝って、資料を検索して借りていく人が増えた結果、図書館での経験も、自分の認識を確かめることにとどまるようになりつつあります。

■「知る」ことの難しさは素養にもあります

- このような「知る」ことの難しさは、インターネットや図書館だけの問題ではありません。「知る」ための素養の問題でもあります。
- インターネットは、使い方を工夫すれば「知る」ための道具になります。図書館も同じく、資料の量が多くても、資料を手に取り、関連づけることができれば、「知る」ことを支えてくれる場所となります。
- 「知る」ための道具は多様化し、豊かになっているはずなのに、「知る」ための素養が十分に育まれていないために、道具を活用できない状況にあるともいえます。

■「知る」ことは読書に限りません

- 本はもちろん、インターネット上の様々なコンテンツも「読む」ものです。文章、映像、音声を読み解くことが「知る」ことであり、その点で本もインターネットも同じものです。
- しかし、「知る」ことは「読む」ことに限りません。誰かとしゃべったり、何かをつくったりするなかで直感的に「知る」こともあります。そう考えると、これまで「知る」ことを「読む」ことに偏って考えすぎてきたのかもしれない。
- インターネットや図書館のほかにも「知る」機会は数多くあります。もちろん言葉で表現できてこそ体験になるのですが、それら機会は直感的であるがゆえに深く「知る」ことにもつながります。

3. 図書館等複合施設での情報環境を通じた体験

- 図書館等複合施設では、情報環境を通じて様々な資料を目にし、小千谷のことを感じながら、思い思いに過ごすことができます。
- もちろん、図書館として、郷土資料館として、子育て支援施設として、子どもの遊び場として、活動・交流のための場として、一人ひとりの目的に応じて使うことができます。
- 同時に、それらの機能が融合され、さらに実空間とバーチャルな環境がつながることで、様々な「知る」ことができ、また誰かの「知る」ことを助けることができます。

■自然と、楽しみながら「知る」ことができます

- 施設に用意された多様な資料を通じて認識を広げていきます。特にフロートのあるエリアでは、予期せぬ資料に出会い、また資料と資料の関係に気づくことができます。
- そのような体験を重ねるなかで自然と「知る」ことができるようになっていきます。
- また、何かをつくり、誰かと語り合うことができ、そのなかでも認識が広がっていきます。

■小千谷のことを「知る」ことができます

- 小千谷というまちへの認識を深めていくこともできます。
- 昔の物事や歴史上の人物を知るだけでなく、いままさに小千谷で起きている出来事や同時代の人たちを知ることで、小千谷のイメージが変わっていきます。
- 小千谷で暮らす人々が共有する関心も、小千谷のこととして「知る」ことができます。

■「知る」ことを通じて人とつながることができます

- 共有される関心を「知る」ことがきっかけとなり、これまでの人間関係が深まったり、これまで出会ったことのない人たちと交流したりすることが起こります。
- 長年知っている人の意外な側面を「知る」こともあれば、近所に住んでいながら交流したことのない人と共通の関心があることを「知る」こともあります。
- このように「知る」ことを体験し、小千谷のことを知り、人とつながっていくことで、暮らしのり・デザインに取り組むようになっていきます。

■誰かの「知る」ことを助けることができます

- 図書館等複合施設では、誰もが、誰かの「知る」ことを助けることができます。
- 小千谷のことを自分たちで調査し、郷土資料として保存することで、小千谷のことを「知る」助けができます。
- さらに、お互いに学び合う機会を企画したり、誰かの学びを手助けしたりすることもできます。そのなかでは、各々の考え方や価値観を交換することで、お互いがお互いの「知る」を助けることとなります。
- 資料を読み、学び合う機会に参加するかぎりの「お客さん」とどまらず、誰もが「知る」ことができ、誰もが「知る」ことを助けることができる、様々な利用、様々なかわり方ができます。

第3章 資料とは

1. 資料の位置づけ

- 資料は、図書館等複合施設で「知る」ことの基本となるものです。
- 「読む」資料にくわえて、触れたり、味わったりするなど、五感を通じて体験できる資料もあります。
- 様々に体験される資料が、語り合うことやものづくり、美術作品の鑑賞を通じて「知る」ことの基本として用意されています。

2. 3種類の資料

- 図書館等複合施設の資料には、図書等資料、郷土資料、ウェブ資料の3種類があります。
- これら3種類の資料があることで、基本理念に示された「新たな発見があり、ワクワクする」と「小千谷のことがわかる」ことを体験できるようになります。

■図書等資料

- 図書等資料は、一般的に図書館で所蔵される図書資料（郷土資料を除く）、音声資料、映像資料をいいます。
- 「知る」ためには言葉が必要です。体験は、それを言葉として表現できてはじめて、「知る」ことにつながります。その点で図書等資料は、言葉に触れるという点で、「知る」ことの基本である資料の基層をなすものといえます。
- 図書等資料は、人々の関心や施設内外での活動内容、また郷土資料との関係から、利用者がかわることで選書されます。
- なお、電子書籍については、読むことに困難さを感じる人の利用可能性を高めること、施設から離れた地域に住む人たちが資料を手に取り、読むことができることなど、公平性に配慮しながら用意することを検討します。

■郷土資料：小千谷に関する「ひと」「もの」「こと」

- 郷土資料は、小千谷市にある「ひと」「もの」「こと」で構成されます。
- 「ひと」は、小千谷市を代表する人物にまつわる資料にくわえて、現在の小千谷で暮らす人や市内で活動する団体など、生活者に関する資料を独自に作成し、用意します。
- 「もの」は広い意味での文化財です。郷土資料館で保存・公開されるような資料のほか、施設外に点在している、ないしは市民が私蔵している文化財も含まれます。さらに小千谷市内に限らず、広域的に捉え、周辺自治体と連携して用意します。
- 「こと」は、文献には記録されていない過去の出来事を独自に調査し、編纂する資料です。小千谷市では中越大地震に関係する資料が震災文庫として収集されていますが、そのような大きな出来事から些細な出来事まで、利用者の関心に応じて調査し、収集します。
- さらに、「こと」については、現在進行形の出来事についても適宜記録し、将来に向けた郷土資料として保存します。

■ウェブ資料：ウェブ上の「ほん」「ひと」「もの」「こと」

- ウェブ資料は、図書等資料と郷土資料が実空間で用意されるのに対して、バーチャルな空間で用意されるものです。
- そのひとつは新聞記事や百科事典などをインターネット上で調べることのできるオンライン・データベースです。
- さらにウェブ上で公開されている様々なコンテンツのうち、郷土資料に該当するものも含まれます。つまり小千谷のことに関するコンテンツです。
- また、図書等資料や郷土資料と関連して、「知る」ことを促すウェブ上のコンテンツも、ウェブ資料となります。

■資料を横断して「知る」ことを支える

- 図書館等複合施設では、実空間とバーチャルな空間が融合した情報環境において資料と資料の関連性に気づき、そのネットワークを辿っていくことで新しい資料に出会うことができます。
- そのなかで、たとえば手に取った資料からウェブ資料へと関心が広がるなかで新しい世界が開けることもあれば、郷土資料を掘り下げるなかで小千谷に対する認識を深めることもあります。
- 図書館等複合施設では、多様な資料が用意され、情報環境において関連づけられることによって、新たな発見をもたらし、小千谷のことが分かるようになります。

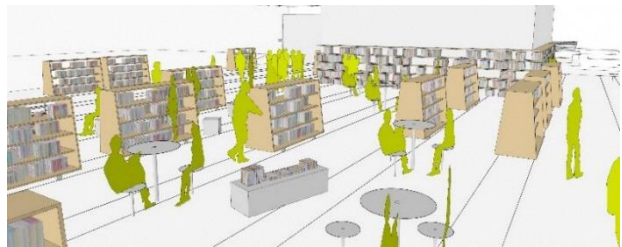
第4章 実空間における資料の用意

1. フロートを通じて「知る」こと

- 図書館等複合施設は閉架書庫もあわせて最大18万点の図書等資料が収蔵できます。
- フロートがつくる動的な資料空間には、約40台の動く書棚と可動式の展示台に約2万点の図書等資料と郷土資料が用意され、思い思いに資料を手にすることができます。

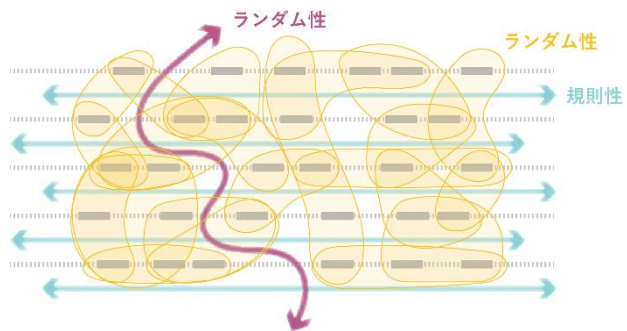
■たくさんの「小さな資料のまとめり」が目に入る仕組み

- フロートのあるエリアでは、たくさんの「小さな資料のまとめり」が目に入ってくる空間です。「小さな資料のまとめり」は、ある書棚に見つかることもあれば、書棚と書棚の組み合わせのなかに見出されることもあります。
- フロートがランダムに並べられたエリアでは、自ずと探索的に移動することができ、視界が移ろうなかで、書棚や展示棚の配置のなかから「小さな資料のまとめり」を認識することができます。
- そのようにして、自然と「知る」ことが体験され、また次なる「知る」ことが後押しされるなかで、「知る」ことを楽しむようになっていきます。



■ランダムな出会いと規則に則った探索がともにできる仕組み

- フロートはランダムに並べられますが、書棚が直線的にしか動かせないがゆえに資料の規則的な配列を感じることもできる空間です。
- たとえば、ルールに沿って十進分類法に従って資料を並べれば、一見ランダムでも分類に応じて資料を探ることが可能です。
- ただ、フロートは常に隣接する分類を変えることができるため、自分の関心に応じた分類の書棚に足を運んだときに目にする「小さな資料のまとめり」が新鮮に映り、新たな発見をする、つまり「知る」ことのきっかけとなります。



■各々の関心を投影し、気づき、共有するための仕組み

- バーチャルな空間においてつくられる資料の関連性は徐々に、共有されるであろう関心を表すようになります。そして、その関心を捉えた「小さな資料のまとめり」がつくられるようになれば、実空間においても共有されるであろう関心を表現することになります。
- フロートにおける資料の用意やその配置は、司書だけが行うものではありません。利用者が選書できる書棚があり、利用者が伝えたい「小さな資料のまとめり」がつくられることで、利用者の関心が表現されるようになり、関心の共有への一歩となります。

2. 知のアンカー等における「知る」こと

■大量の資料があること自体で「知る」ことができる場所

- 大量の資料は、一点一点を手にするまでもなく、過去から現在に至る知識の膨大な蓄積、思考や言葉の膨大な蓄積が認識を広げられることがあります。
- 知のアンカーは高密度に資料が用意された場所であり、その密度によって「知る」ことができます。
- また知のアンカーには、詩人・英文学者・画家である西脇順三郎に縁のある図書資料（西脇文庫）を集約して配置されており、西脇の創作の世界観を感じることができます。

■つくり、語り合うことと資料を関連づけて「知る」ことができる場所

- フロートのあるエリア近くのアンカーの壁にも資料を用意します。
- それら資料は、アンカーでの活動と関連づけられることで、その活動に関心を持つきっかけとなります。
- また、アンカーでの活動で必要なことを調べるための参考資料にもなります。
- さらに、アンカーとアンカーのあいだの空間にも「小さな資料のまとめり」ができ、関心を共にする人たちを引き寄せ、交流が生まれる空間にもなります。

■アクセスしやすい閉架書庫

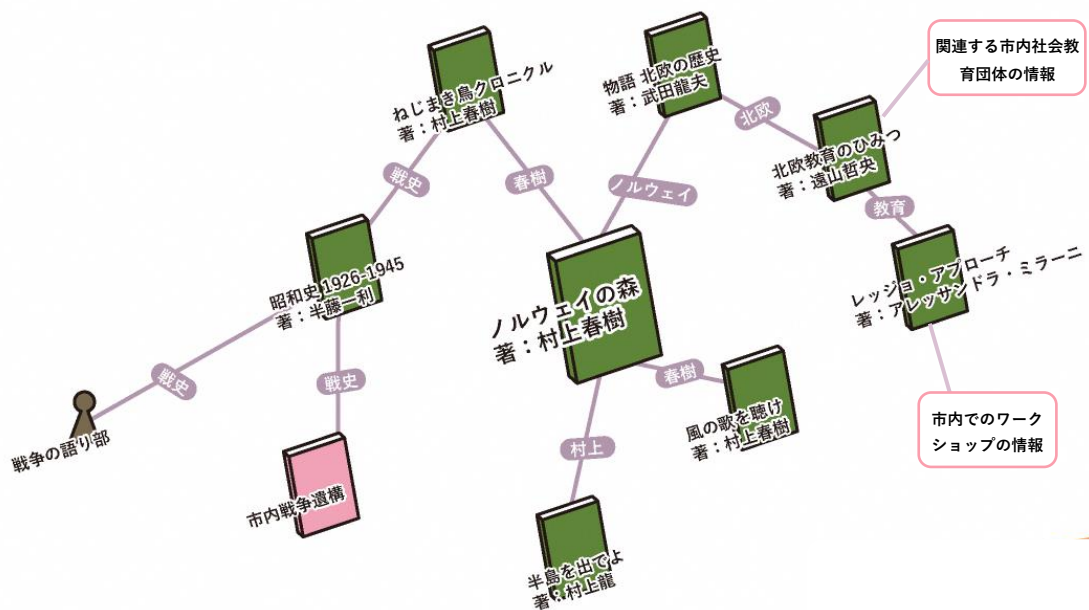
- 閉架書庫は、関心に応じて資料を引き出せるように資料を用意している空間です。
- 閉架書庫に配置された資料は結果として「死蔵」されることが少なくありません。そこで、図書館等複合施設では、情報環境における資料のネットワークを通じて、フロートや知のアンカーに用意された資料から閉架書庫の資料へと関心を伸ばすことができます。
- そうすることで閉架書庫も、「知る」ことのために資料が用意された空間となります。

第5章 バーチャルな空間における資料の用意

1. 利用者がつくる資料のリンク

■利用者が資料を介してコミュニケーションする仕組み

- 図書館等複合施設では、バーチャルな空間（資料データベース上）において、利用者が自分のお薦めの資料を公開でき、資料についてコメントを交わし、お互いの資料をリンクしていくことができます。
- 資料がリンクされることでつくられていく資料のネットワークは、共有されるであろう関心を表すようになり、フロートやその配置、アンカーでの活動に際して参照されることで、実空間において共通の関心が顕在化していきます。



■資料を介して誰かの「知る」を助ける仕組み

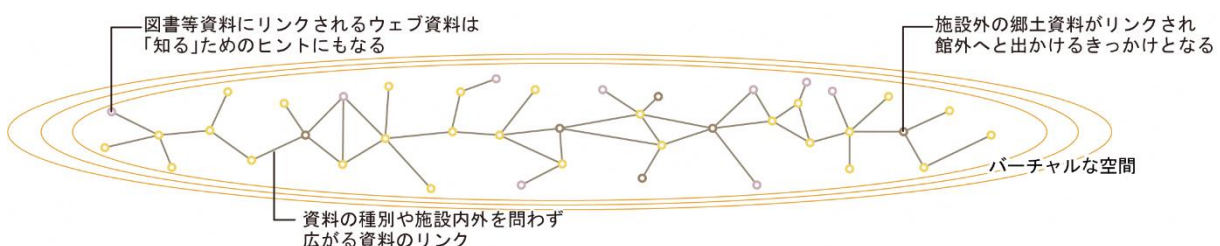
- 資料をリンクすることは、公開されている資料からその人の関心を読み取り、自分の関心に照らして、関連する資料を薦めることであり、「知る」ことを助けることとなります。
- さらに、そのようにリンクされていった資料のネットワークは、薦め合いの連鎖となり、草の根でつくられた「知る」ためのヒントの束となります。そして、そのネットワークをたどることで連鎖的に資料と資料が関連づけられていき、関心が広がっていきます。
- リンクをたどることは手間のかかることに映るかもしれませんが。インターネットのようにリンクを機械的に読み解いて推薦することが期待されるかもしれませんが。しかし、誰かの関心を踏まえて何かを薦めるという行為は、機械ではいまだ難しいものであり、人と人の関係性があるからこそ可能となると考えます。
- そのようにしてつくられる資料のリンクをたどることは、人と人の薦め合いの履歴をさかのぼることであり、遠回りしながらも確実に「知る」という経験へと向かいます。そして、利用者の関心の連鎖をたどることそのものも、小千谷のことを知ることとなります。

■実空間とバーチャルな空間をつなぐ仕組み

- 資料のリンクは、実空間とバーチャルな空間をつなぐ入口にもなります。
- 実空間で手に取った資料から、バーチャルな空間における資料のリンクを辿って資料探索を行い、また実空間の資料を手に取るようにすることで、実空間とバーチャルな空間をつなぎます。
- 実空間とバーチャルな空間の融合は、このように「知る」という行為において実空間とバーチャルな空間がつながることで実現されます。

■利用者が蔵書の範囲を広げていく仕組み

- 資料のリンクは、フロート、知のアンカー、閉架書庫を問わず広がるため、資料の配置にかかわらず資料探索ができるようになります。
- さらに館外、さらには市外の文化財（の情報）がリンクされ、ウェブ上のコンテンツがリンクされることで資料が、施設に限定されることなく広がっていきます。
- また、イベントなどの現在進行形の出来事や市内で活動する人や団体にリンクされることで、資料に対する関心が活動へと転化するきっかけともなります。
- このように、図書館等複合施設で「知る」ことは、蔵書という制約を超え、施設という空間も超えて広がっていきます。



■潜在的な共通の関心を読み解く仕組み

- 利用者がつくる資料のリンクは複雑なネットワークとなっていき、人々の関心の複雑な束のようなものとなります。
- ネットワークの結節点となる資料や多くのコメントが交わされる資料は、人々の関心の高いものと考えられ、そのような資料が形成するクラスターには共有されるであろう関心が表れていると考えられます。
- 利用者が草の根でつくるからこそ表れる集合的な関心を読み解き、その関心をフロートやその配置、アンカーでの活動に表現できるような仕組みを図書館システムとして用意することを検討します。
- そうすることで、バーチャルな空間における資料を介したコミュニケーションを素地として、施設内での出会いや交流へとつながり、コミュニティ、そして活動へとつながるきっかけをつくれるようになります。

2. 利用者がつくる郷土資料

- バーチャルな環境では、リンクによって蔵書を増やしてだけでなく、利用者が新たに作った郷土資料も収集・保存し、公開することができます。

■「もの」を記録し、活用できるようにします

- 図書館等複合施設では、小千谷に関する「ひと」「もの」「こと」の収集・記録・保存・公開・発信を協働で行うプロジェクトを行いながら、郷土資料の収集を行います。それら郷土資料は、「もの」そのものが所蔵されることもありますが、多くの場合は、その記録が収集・保存・公開されます。
- 市内に点在する文化財であれば写真や動画を撮影するほか、3D スキャンするなどしたデータを収集・保存・公開します。民俗芸能のような無形物であれば、その様子を動画で記録し、将来に向けて継承していくためのアーカイブとします。
- それらデータは、施設での学習の機会はもちろん、学校教育や市内外での文化活動で活用できるようなかたちで公開します。

■「ひと」「こと」を記録し、活用できるようにします

- 「ひと」や「こと」に関しては、いままさに起こっている出来事や活動する人を取材し、記録を残し、小千谷のこととして収集・保存・公開していきます。そのほかにもツイッターやインスタグラムを活用し、半ば自然と「ひと」や「こと」に関する資料が集まってくるような仕組みも検討します。
- このように収集される現在の小千谷で暮らす「ひと」に関する資料は、人と人がつながり、交流するためのきっかけとなります。
- 「こと」については、市内の様々な活動や出来事を記録・発信することが、活動の輪を広げるとともに、将来において参照できる資料を用意することになります。
- このように「ひと」や「こと」に関する郷土資料は、利用者によってつくられ、利用者によって活用されることで暮らしのり・デザインを支えるものとなります。

■西脇順三郎という「ひと」「もの」「こと」を活用できるようにします

- 西脇順三郎は、詩人・英文学者・画家という3つの顔を持つ郷土の偉人としては「ひと」であり、西脇文庫は「もの」であり、西脇が詩に詠んだ「こと」はまちの各所に見つけられます。
- 西脇文庫を起点として、西脇の詩作の世界に触れるような資料のリンクをつくることはもとより、小千谷で暮らした西脇順三郎という観点で「ひと」「もの」「こと」と関連づけ「小千谷のこと」を「知る」入口として活用します。「こと」はまた、西脇を同じく小千谷に生きた人として認識する機会をもたらすこともあり得ます。
- さらに大学等研究機関とも連携して文学研究に寄与するアーカイブをつくるなど、西脇という「ひと」を「知る」ために、また西脇を通じて小千谷のことを「知る」ために西脇文庫を使うことを試みます。

第6章 「知る」ための郷土資料の活用

1. 郷土資料の配置

■図書等資料と郷土資料が一体的に目にすることができます

- 図書館等複合施設は小千谷のことを「知る」ための資料のひとつとして、図書等資料と区別することなく、フロートに配置します。
- 企画展示を行う場である「作のアンカー」ではもちろん郷土資料を展示しますが、利用者によって身近なフロートのあるエリアで図書等資料とともに配置することで目に留まりやすくします。そのため郷土資料も、図書等資料と同じく十進分類法に従って整理します。
- 西脇順三郎ゆかりの資料（西脇文庫）も同様であり、フロートに展示し、自然と目にすることができるようにします。そして複本を所蔵することで資料を手にとれるようにしたり、書き込みがある資料や入手困難な資料は電子化したりすることで読めるようにします。

■小千谷に縁のある「ひと」「こと」を自然と目にすることができます

- 郷土資料として収集される「ひと」「こと」も、フロートに配置されたり、資料とリンクされたり、アンカーでの活動と関連づけるかたちで配置されたりすることで、利用者が自然と目にするようになります。
- また、ツイッターやインスタグラムなどの SNS で発信される小千谷に関するコンテンツも、施設内で目にする機会をつくります。

2. 郷土資料の使い方

■地続き感を持って小千谷のことを「知る」ことができます

- 郷土資料のうち、「もの」に関する資料は、市内で発掘される土器や石器、民具のように所蔵できるものもあれば、寺社仏閣や祭りのように館外で体験するものもあります。
- いずれにせよ「もの」は鑑賞するだけでなく、実際に触れることができ、身を置き、体験することができます。そのような体験は小千谷のことを、肌身を持って「知る」ことにつながり、歴史を自分たちと地続きのものとして感じるすることができます。
- そのため郷土資料は、できるかぎり手にとることのできるかたちで展示することで、五感を通して「もの」の価値に気づき、その「もの」があった時代に思いを馳せ、小千谷のことを「知る」きっかけとします。
- また「もの」の価値に気づき、新たな価値を見出すことは、暮らしのり・デザインへもつながっていきます。

■「ひと」「こと」を目にすることが暮らしのり・デザインにつながります

- 「ひと」「こと」に触れることも、暮らしのり・デザインにつながっていきます。
- いま小千谷で活動する「ひと」、起こっている「こと」を見聞きするなかで、いまの小千谷に関心を持てるようになり、自分がつながりたい「ひと」や参画したい「こと」に気づき、それが自分たちの暮らしを変えていく暮らしのり・デザインの一步となります。

第7章 暮らしのリ・デザインに向けたアンカーの活用

1. フロートと利用者の集まり

■関心が場所を生み、場所が関心への気づきをもたらします

- 利用者は、フロートやその配置のなかに、自分の関心に照らして「小さな資料のまとめり」を見出します。また、目に入ってきた「小さな資料のまとめり」から、これまで自分でも気がつかなかった関心を「知る」こともあります。
- また、そこに利用者がいて、資料を手を取っている姿を目にすることで「小さな資料のまとめり」に気づき、これまで気がつかなかった関心を「知る」きっかけともなり、また関心を共にする人の存在を思うようになります。

■場所を共有している感覚がもたらされます

- フロートによってつくられる資料空間のなかに関心を共にする人が緩やかに場所を共有するという状況が徐々に生まれていきます。そして、そのような状況が生まれると、ときにはその場所で偶然顔を合わせることもあるかもしれません。さらに偶然の出会いが続くこともあるかもしれません。
- このように緩やかに、かつ期せずして場所を共有する感覚は、徐々に同じ場所にいる人同士が何か関心を共有しているかもしれないという感覚をもたらすようになっていきます。

2. 共有される関心とアンカーのリンク

■関心の共有やその表現を通じて安心感が生まれます

- バーチャルな空間で資料の関連づけを相互に行い、資料を介したコミュニケーションをすることや、フロートにおいて関心による場所の緩やかな共有を体験することは、誰かと関心を共有しているかもしれないという期待感にもつながります。
- そして、バーチャルな空間のコミュニケーションやフロートの組み合わせにかかわるなかで誰かに関心を表明することに不安を感じないようになり、実際にそれを表すことを通じて、図書館等複合施設が、自分たちの関心が受け止められる場であるという安心感を覚えるようになります。

■共有される関心がアンカーで表現され、人がつながります

- アンカーでの交流や学び合いの機会では、共有されるであろう関心をテーマにします。それは利用者の関心に応えるという意味もありますが、共有される関心が明示的に表現されることに意義があります。
- そのような機会には関心を共にする人が集まります。そこではバーチャルな空間でコミュニケーションをした人と出会ったり、いつかフロートのあるエリアで偶然居合わせた人と出会ったりします。そのような機会があり、また安心して関心を表明できる安心感もあることが、人と人が無理なくつながることを後押しすることとなります。

3. 暮らしのり・デザインと資料の関連づけ

- アンカーは暮らしのり・デザインの間であるとともに、資料と組み合わせられることで、その活動を広げ、また活動を助ける情報環境にもなります。

■交流から活動、実践へと展開していく場となります

- アンカーで人と人がつながるなかで、日々の暮らしについて情報を交換し、共通の問題や価値観に気づくこともあります。その気づきがきっかけとなって、自分たちの抱える問題を解決したり、自分たちが求める価値を実現したりすることもあるはずです。
- それはお互いを「知る」ことであり、「知る」ことがコミュニティの形成につながっていきます。そして、自分たちの暮らしをより良くしようという実践へと展開していきます。
- そのなかで新たな「問い」を見つけ、探求することで実践が新たな展開を遂げていくこととなります。
- アンカーは、そのような可能性を有した場であり、そのような可能性を発現させるような運営を検討する必要があります。

■アンカーのあいだの資料は活動を表現し、広げます

- アンカーが活用されるようになると、アンカーのあいだに配置される資料も、アンカーでの活動を表現するようになります。
- つまり、フロートにおいて潜在的な共通の関心が表現されるように、アンカーにおける活動やそこで共有される関心が資料のまとまりを通じてアンカーの外に発信されるようになります。
- それら資料は、その関心を共有する利用者の目に入り、アンカーでの活動へと緩やかに関心を促し、引き入れていくきっかけとなります。

■アンカーのあいだの資料は活動を助けます

- アンカーのあいだに配置される資料は、またアンカーでの活動にとって参照となる資料であることも望めます。
- 司書や学芸員、さらにはそのアンカーでの活動のノウハウを有する市民が、活動の助けとなる資料をアンカーのあいだに忍ばせ、また関連する分類のフロートを近づけることで、アンカーで活動する利用者の気づきを待ちます。
- さらに活動を直接的に助ける資料のみならず、次なる展開へとつながる「問い」を発見するために資料が用意されることもあります。
- これは問い合わせを待つプル型のレファレンスでも、プッシュ型のレコメンドでもなく、活動が行われる空間に資料を埋め込み、気づきを待つという新しいタイプのレファレンスとなります。

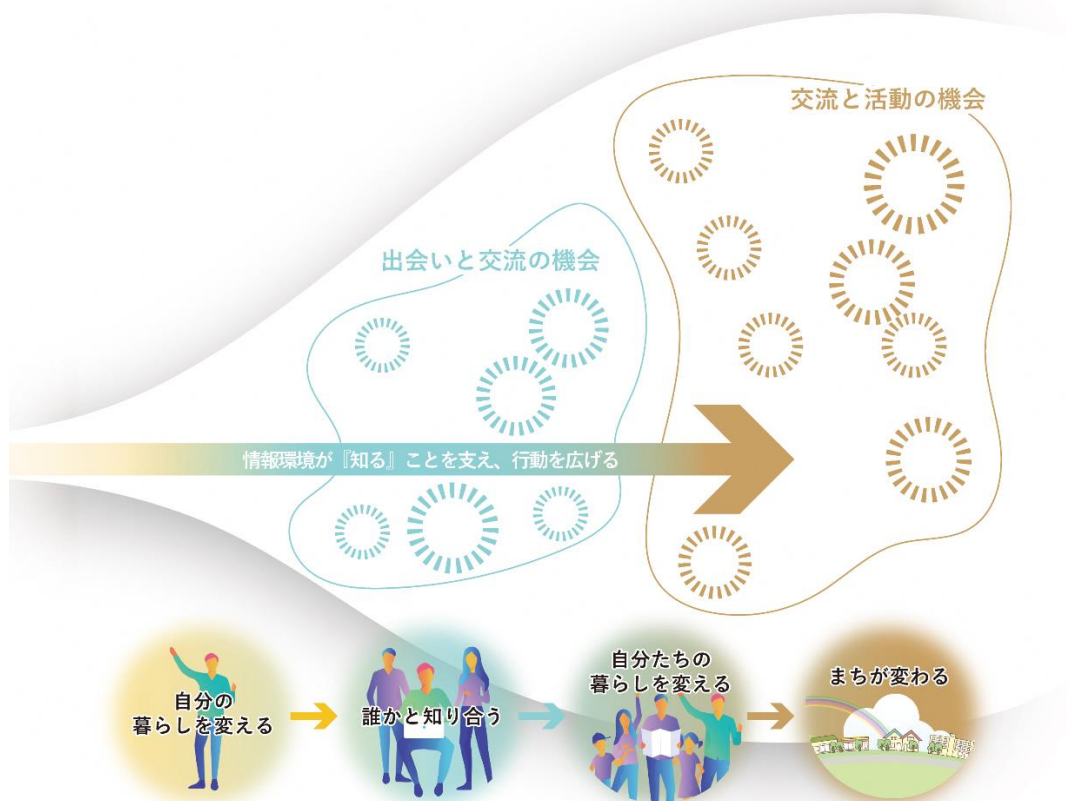
4. アンカーのまちへの展開

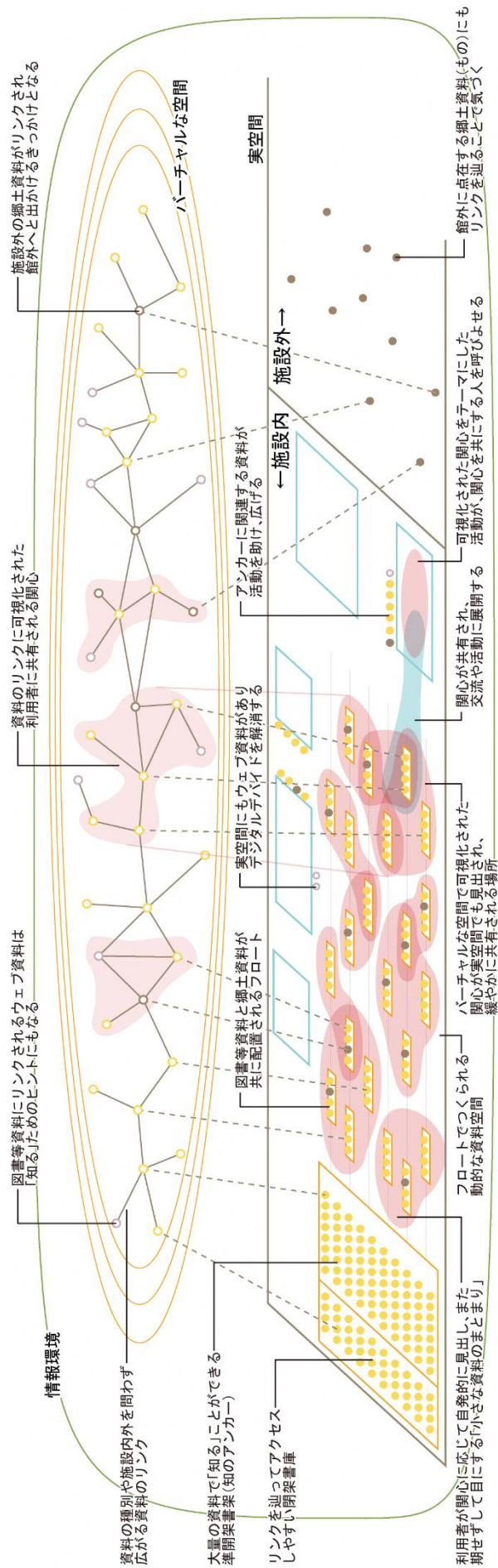
■まちの様々なストックがアンカーになります

- アンカーは図書館等複合施設内の12の空間にかぎるものではありません。
- 本町商店街にあるスーパーや銀行などの生活インフラや市内各所に点在する空き家や空き店舗などもアンカーとして活用することで市民の日常をより支えていくこともできます。
- まちなかのアンカーは、資料が置かれることで、身近に資料を手にとることができるようになり、地域の人々が集まる場となり、身近な問題に取り組む暮らしのり・デザインの実践の場となっていきます。

■アンカーを資料とし、つなげ、広めます

- 情報環境では、アンカーも郷土資料の「もの」ととらえ、記録・公開していきます。それはアンカーの所在を知らせ、館内のアンカーと同じく、広く利用に供することが可能となります。
- また、アンカーでの活動は「こと」として、そして活動する人々を「ひと」として記録し、公開することにも取り組みます。その取組を通じて、市内での様々な活動をリンクさせ、活動する人々をつなげることで、情報環境が小千谷市全体のハブとなり、市内各所の暮らしのり・デザインを後押ししていくこととなります。





第8章 学び合う機会のあり方

1. 社会のなかで「知る」こと

- 図書館等複合施設には、様々な学びの機会が用意されています。
- それは、誰かと何かをいっしょにつくったり、演じてみたり、話し合ったり、それぞれがつくったものを評価し合ったりすることで、お互いに学び合っていくような機会です。
- このような協働的に学び合う機会は、たくさんの人とお互いの認識をつき合わせるなかで、自分の認識が広がり、更新されていきます。
- 言葉を通じて一人で「知る」ことができる読書に対して、協働的に学び合うことは社会のなかで「知る」ことができる機会といえます。

2. プロジェクト型の学び合い

- 図書館等複合施設では、施設整備段階から利用者と市役所職員、施設職員が共に活動する共創の場である小千谷リビングラボ「at! おぢや」から生まれる様々な学び合う機会があります。
- それらは、立場を超えたコミュニケーションをするなかで、施設職員、利用者、市民団体、企業の区別なく、企画され、実施されるものです。
- 週末や平日夜に気軽に参加できる機会もあれば、何日か続けて参加するような機会もあります。郷土資料を調査・収集するような発信型のものもあります。
- 図書館等複合施設では、特にアウトプットを伴う機会をプロジェクト型の学び合いと呼び、重視します。

■紆余曲折があるからこそ「知る」ことができます

- プロジェクト型の学び合いは、何らかのアウトプットを協働で継続的に作り出そうとする活動であり、協働的な学び合いのひとつです。
- 何らかのアウトプットを集団的に作り出そうとするなかでは、紆余曲折がつきものであり、そのたびに参画する人々のあいだで認識のつき合わせが発生することになります。このプロセスのなかで各々が個々の能力に気づき、適切な役割分担がなされ、アウトプットに向かうにつれてお互いを認め合っていくこととなります。
- 自分の能力への気づきと、その能力の集団における活かし方への理解は、自分に対する深い気づきにつながります。これは、自分に対する認識が更新するという点で「知る」ことともいえます。

■暮らしのり・デザインへとつながります

- プロジェクト型の学び合いは、ひいては暮らしのり・デザインにもつながります。
- プロジェクト型の学び合いに参加する人は、自分の能力に気づき、その活かし方を知ります。そして、「ひと」「こと」に関する郷土資料を通じて、能力を活かす先を知ることで、暮らしのり・デザインに取り組む活動への参画へとつながります。

3. 子どもが遊び、学び、「知る」ための場所・機会

- プロジェクト型の学び合いの機会には、もちろん子どもも参加できます。
- ただ、子どもたちは、そのような機会がなくても、子ども同士で遊ぶなかで、またまちなかを歩くなかで、自ずと学び、また「知る」ようになっていきます。
- 図書館等複合施設は、学校や地域と連携しながら、すべての子どもがそのような体験をする施設を目指します。

■自由に遊ぶなかで学ぶことができる場所

- 図書館等複合施設には屋内広場があり、季節や天候にかかわらず自由に遊ぶことができます。広場全体が、子どもが遊ぶための環境となっており、そのなかで様々な遊ぶことのできるきっかけを子どもなりに感じ取り、工夫しながら遊びます。
- ときには遊びを通して冒険や挑戦をすることもあれば、いっしょに遊んでいるうちに意見がぶつかることもあります。冒険や挑戦は身体的な危なさも内在しており、意見のぶつかり合いは子どもたちの関係性にもかかわります。ただ、そのような体験も遊びの価値であり、学ぶことにもなると考え、子どもの遊び場のあり方を子どもたちとともにつくっていきます。

■資料や活動を自然と目にすることができる場所

- 子どもは、目に見たものから学ぶものです。様々なものを見て、手で触り、肌身をもって知っていきます。言葉を知ること、ものを見ることから始まるはずです。
- こどもとしょかんはもちろん、子どもたちが様々な資料を自由に手に取ることができます。さらにこどもとしょかんが施設の奥まった場所に位置することで、フロートのあいだを歩き、資料を目にし、アンカーの様子を垣間見ます。
- そのなかで子どもは、資料や大人たちの活動から、子どもながらに関心を伸ばしていきます。そのような出会いが期せずして子どもたちに「知る」ことをもたらします。

■子どもも社会のなかで「知る」ことができる機会

- その上で図書館等複合施設では、子どもを対象としたプロジェクト型の学び合いの機会も用意します。
- 友だちやクラスメイト、家庭といった日常の関係性から離れ、プロジェクトを進める上での仲間と出会い、仲間たちとの紆余曲折を経ることは、新鮮な体験となります。その体験は、日常のなかで硬直しかねない自己認識や人間関係を更新することをもたらします。
- 自分が好きで得意なことに目を向けることができ、それをどのように活かしていくのかということに気づくことができます。そして、図書館等複合施設での様々な資料に触れるなかで、何に関心があるかが分かってきます。
- まさに自分を「知る」なかで、将来何をして、どのように生きるのかを考えることへとつながっていくことが期待されます。

■すべての子どもが公平に遊び、学ぶための仕組み

- 図書館等複合施設は小千谷の中心市街地にあるため、すべての子どもが平等にアクセスすることは難しいと言わざるを得ません。そのような状況のなかであっても（あるからこそ）、遊ぶこと、資料を手にする事、「知る」ことに対して、あらゆる子どもが公平であるべきです。
- そこで、学校や地域と連携し、資料を手にとること、遊びや学び合いの機会への公平なアクセスを保障するための取組を検討します。